

特支教育において、生活単元とは生活に密着した活動を通して自立的な生活ができるように実際的に学習するものです。

ゴールの自立的生活の想定モデルによって必要な学習活動が設定されるものだと思います。私が養護学校に最初に勤務した時期1990年あたりに子供たちに想定したモデルは、「公共交通で目的場所に行き、買い物ができ、困ったら公衆電話で連絡できる。」というモデルでした。そしてそのゴールに到達するため、学校で練習した後、体験学習を何度も行いました。当時の写真やビデオをご覧ください。

2022年現在の通常教育の理想は「未知の環境と未知の課題に立ち向かい課題解決できる人」ではないでしょうか。子供達の未来は予想が難しい、未知の時代になる。その中で課題解決して自立する。という形でしょう。

ですが、特支教育はどうでしょう。未知の課題を自分から解決していくのは難しいでしょう。知的に支援が必要な、または情緒に支援が必要な子供たちは、行動を身に着けるのに多くの時間がかかります。

事実、この生活単元も「公共交通で移動し、買い物ができ、公衆電話で連絡する」という行動が安定してできるまで2年近くかかりました。

その5年後に担任した特支学級では進学先まで通い、電話ができるという形を身に着けるため、実習を重ね、シュミレーションアプリを制作しました。しかしこの生活モデルは15年で変化して不要のものになりました。

まず公共交通が激減しました。山形交通の路線バスルートと本数は幹線道路以外ないも同然です。個人商店もなくなり、人にお札を出してお釣

生活単元

生活に密着した活動を通して
自立的な生活ができるように
実際的に おこなわれる学習

中学校 生活単元

生活モデル (1990年代の目標モデル)

公共交通に乗り
買い物ができて
困ったら電話をかけられる

着替え、洗面、入浴、食事を身につけた後に

生活モデル

公共交通に乗り
買い物ができて
困ったら電話をかけられる

進路先「鶴岡高等養護学校」に
公共交通を使い自力で行き、
困ったら電話連絡が出来る。

アプリ等で学校のシュミレーション

実際の体験学習
教師・保護者・本人
本人だけでできる

シュミレーションは実体験と繰り返しして有効になる

疑似体験と実習を重ね できることを身に着けていく



実習から15年で想定した生活モデルが不要となる

公共交通 ⇨ バス・電車の激減

買い物 ⇨ カードや機械の支払

公衆電話 ⇨ ガラケー ⇨ スマホ

りをもらう形の買い物はもうありません。
スーパーでもセブンでもパネルの機械操作で支払いをします。公衆電話もほとんどありません。携帯電話はガラケー、スマホ、と形を常に変化させています。私が最初に特支教育を始めた時期の生活モデルは使えない過去のものになりました。今の生活モデルも目まぐるしく変化していくでしょう。

未来を予測しながら身に着けるべき生活モデルをどう設定していくか、それが生活単元の力ギとなるでしょう。

END

社会が変化し生活モデルも変化する

↓ 1990～2000年当時の
生活モデルは過去のもの

社会の変化を予測し、
身に着けるべき最良と思われる
ものを選択して学習する必要性

変化が激しく現在と違う未来が来る可能性

これから必要な能力

未知の未来に起こる課題を解決できる能力

↓ だが、しかし…

支援が必要な人たちは必要な技能を
何度も繰り返し学び、身につける必要